

11・9 裁判、58回公判開く

別行動とる一部原告ら
原告団を追加除籍
説得拒否し分派に追隨

ゴキブリ

今回の公判ですべての証人調べは終って、いよいよ次回公判で結審となる見通し。（公判終了後の報告集会で）

このような結果が、日数が経つにしたがつて入院患者が増え、重症者が出て専門家を招く事態となり、治療体制を変えていったのではないのかと迫りました。

また、患者のほとんどがCO中毒症にかかっているにもかかわらず、「治療方法はお手あげ」という、当時の天領病院・藤瀬院長の発言を紹介し、治療にあたっての統一見解はなかったことを明らかにしました。

医療班の編成にしても、天領病院の医師には待機の指令が出されましたが、分院の医師には徹底せず遅れたことがわかりました。

十一月十九日の一斉検診にしては、検診者数六百三人を大牟田、

これに対し興國証人は、初期症状のうち重症者の処置で手いっぱいで、CO中毒患者の血液中のヘモグロビンの調査は数人しかしておらず、意識障害についての基準も、意識のある、なし。昏睡状態のある、なし。会話中の態度の変化などが調べられただけで、統一基準はなかったと証言しました。

また、意識不明のCOの吸入濃度、時間などによって、適切な救急活動が行われておらず、一般的な治療だけだったことが明らかになりました。

次回公判は十月七日午後一時からとなっていますが、証人調べはなくこの公判で結審になる見込みです。

一、原告側から、さきの十人に加
 二十人の名簿が出されました
 説得に応じず、分派と行動
 にする次の二十人について、
 の原告団臨時総会の決定をふ
 て除籍することになりました
 宮島 重信(死亡・患者)
 忠地 義高(組合員・患者)
 橋口宏之助(退職者・患者)
 西田 学(退職者・患者)
 山崎 辰秀(退職者・患者)
 東口 一男(退職者・患者)
 中山 岩男(退職者・患者)
 永津 忠行(退職者・患者)
 野田嘉次郎(退職者・患者)

坂井 武義(死亡・患者)
赤井 韋(死亡・患者)
川口幸太郎(退職者・患者)
山本 典之(退職者・患者)
中尾 進(退職者・患者)
井上 文男(組合員・患者)
勝永 末人(退職者・患者)
小宮 北勝(退職者・患者)
永野 八蔵(退職者・患者)
斉藤 巖(死亡・患者)

七つのまちがい(3面)

△こたえ▽ 星、トマホーク、原子雲、右のおり鶴、子どもの口、おじいさんの手、ネクタイ

三池炭鉱の歴史の中から

その四

万田障子岳中国人收容所

武松輝男

軽いマーチに魅せられて、簡易
舗装が壊れたのであろう、万田社
とぎれた谷間というか、そついう
とき、一瞬、時間と空間の
なかつた。もどくもしなかつた
といつていい。

いまは荒尾第五中学校といっているが、ほんの四十年前の、強制連行中国人収容所が建ち並んでいたことを、誰が思い出し、そのあたりの証明をしようとしているか。その様変りに、かつての収容所時代の記録の片りんすら残されていない。

ある記録によると、万田坑で労働させられた中国人は、千二百五十人。その全員が万田障子岳収容

所に収容されていたかどうか
かではない。しかし三交替制
によって面交替とすると、疊一枚に

1985. 2. 13
藤元王

時一人は座居できるものとみて
昇すれば、十分に収容できる。
れにしても、大人が一人は出役
を前提にして、疊一枚に
の収容とは、度を過ぎてい
えはしないか。誰かが病気で
れば、それこそ寝る場所もな
らになる。

引きずる

たとえ「核の冬」が到来しても
地下四百メートルの坑道が
シェルターとなり
見事生き残れるか

人間がいらないというのに

めると、いちどに視界が広がる。陽に映えたライトグリーンと表裏したダークグリーンの明暗をいうどった艶やかな、それでいて若やいだ木立ちの向う側に、白い壁の荒尾第五中学校の二階建ての校舎が見える。

休み時間なのであろうか、女生徒の甲高い声が幾重にも錯綜しながら、暑い、乾いた空をのぼりおりしている。

にかられたものだが、それもかつての強制連行中国人収容所があった頃は、もっと乾いた空に飜っていた声は、重たく、そして温っていた、粘っこいものではなかったか。だから声は地を這い、地は声を濾過して、重い血の匂いからまった韻を、収容所の外側へ漏らさなかったのではないか。

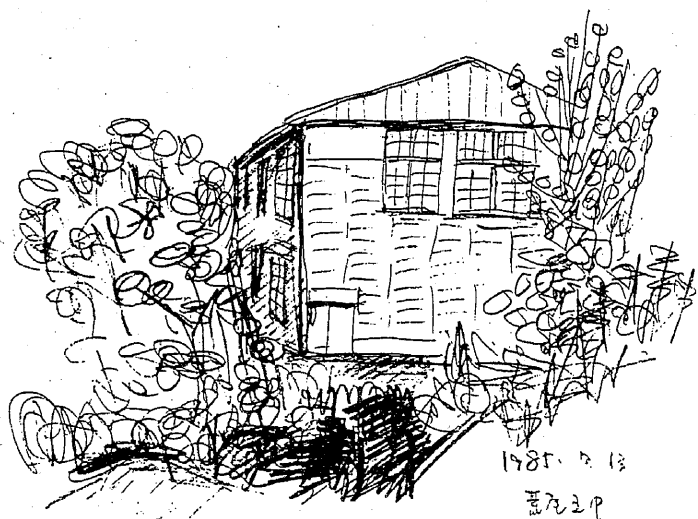
たゞえ、その韻が漏れたにしては、当時の日本人は聞く耳をもたず、

も激しいコントラスト、落差といっ
たほうがよいかもしれないが、そ
の落差は中国から運行してきた中
国人への罪の意識がはたらいてい
るからだと思ふのだが、しかし中
国の炭鉱と提携したり、中国貿易
の拡大を願ったり、中国への観光
旅行の計画などをみながら、華や
いた近代文化との落差の中に落ち
かつて中国人民を虐待したことにつ
いてどう償われているのだろうか。

「なかなか信用してもらえない」と古老は話す。

「この収容所は、万田隲子岳中国人収容所というつもりでしたです。収容所の棟数は、多分十五棟あったと思います。

食堂が二棟ありましたけれど、相当の人数が収容されておったのでしょ。そんな食堂には、パン蒸し釜が三釜、野菜釜が一釜、湯沸し釜が一釜ありました。」



れを中国人に当てはめることも
きまいが、参考数値とみて障子
収容所をみると、収容所は座席
ままならぬものであったこと
が想像できる。

強制連行中を含めて、死亡者
はおおよそ二百九十四人、二十四
セント。強制連行がいかに残
なものであったか、死者の数が
もつかがい知ることができる。

この詩集は、昨年につづいて発
 行された『西日本反核平和詩集』
 集に収載されたものです。



西日本反核平和詩歌句集 第2集

この詩歌集は、核戦争の危機を
 克服し、平和で豊かな生活を
 ———との立場から詩、短歌、俳
 句、川柳などが収めら
 れています。(編集、
 発行は西日本反核平和
 詩歌集刊行委員会。二
 百十九頁、千八百円。
 お問い合わせは編集部
 まで)

歌集は、核戦争の危機
平和で豊かな生活を
立場から詩、短歌、俳
句、川柳などが収めら
れていきます。（編集、
発行は西日本反核平和
詩歌集刊行委員会。二
百十九頁、千八百円。
お問い合わせは編集部
宛）